

の天地を祀る祭祀施設南郊壇殿舎も、景治元年（一六六三）鄭主を中心に修造された。鄭主は黎帝に成り代わって、南郊祭祀を摂行することがあった。国家祭祀を帝が親祭せず臣下が代行することは、有司摂事として一般的であったが、鄭主の場合は「輔臣請如帝親幸之儀」（保泰五年〔一七二四〕春「大越史記全書」續編卷之二）と帝同様に振る舞う期待を受けていた点で度を超えている。鄭主はその名分を冒すことはなかったが、その一歩手前で、国家祭祀の事実上の主宰者として活動していた。鄭主が黎帝を倒し自ら登極しなかったのは、篡奪政権と位置づけて莫朝を打倒して後黎朝を再興したという大義名分と、富春に追い遣った好敵手阮主の存在であったと考えられる。

翻って日本の事情を見よう。江戸幕府は、伝統的に天皇・朝廷が担ってきた国家祭祀対象の神社を修造した。しかし、徳川将軍家や江戸幕府が、天皇・朝廷が掌握する祭祀権を奪取したり、積極的に代行することは、大局的に見てなかった。徳川将軍家の年中行事に組み込まれた祭儀は、その殆どが自家の追善に関わるもので、国家祭祀とはいえない。

このように同じく帝を戴く霸王でも、鄭主は祭祀権の代行に積極的であり、逆に徳川将軍は祭祀に対し淡泊に見える。この差違は、東アジア規模において近世日本の国家権力を理解するための重要な論点である。本報告で答えを出すことはできないが、有効と考えられる視点を示しておく。両国両様の「小中華意識」である。ベトナムは「南国」すなわち南の中華帝国という小中華意識を有した。ベトナムは中華帝国から見れば「安南国王」などの称号で冊封を受ける諸侯国だが、ベトナム自身は

「北朝」たる中華帝国と「天」を分け持つ「南国」で、独自に国号を定め、「皇帝」を擁し、中華帝国と対等外交を展開していると認識していた（古田元夫『ベトナムの世界史』）。それゆえ、儒典に則れば「天子」にのみ許される南郊祭祀を行い得たのである。とはいえ、ベトナムの国家祭祀は、中華帝国に範をとって行われていた。かかる国家祭祀のありかたは、当時の東アジアの国際標準であった。したがって、権限さえ得られれば、祭祀を担う者の系譜は問われない。

かたや日本の小中華意識は「神国」として顕在化する。「神国」を弁証するのは八百万の神々であり、高天原の主宰神天照大神の子孫とされる天皇であった。近世初期の日本において、より普遍性を持つ「天道思想」は一定のイデオロギーとなっていたが、それすら「神国」と不可分の形でしか展開しなかった（高木昭作『将軍権力と天皇』）。かかる点に、徳川将軍家が国家祭祀への関与に消極的に見える根拠があると考えられよう。なお本報告は科研費基盤研究（C）（研究課題番号二一五二〇〇九一）による成果である。

大学における宗教教育に関する認識と期待

荻野 勝行

我が国の大学等の高等教育機関には、特定の宗教が基盤となり、その宗教のエッセンスを建学の精神や教育の理念としているものが多数ある。主にこのような大学等においては、その宗

教に関係する科目が設置され、関連する宗教行事が行われている。そして、我々はこれらを宗教教育と称する。このような大学等においては、その特定の宗教者を養成する学部を有するものとそのような学部は有せず、広範に全学的な宗教教育が展開されているものに大別することができる。前者に関しては、大学等を運営する上において、コアとなる教育部門が存在し、それによって宗教教育に明確なベクトルを認めることができる。後者に関する宗教教育の有様はその大学等の姿勢に大きく影響を受ける。今回は後者における宗教教育に関して、検討を行うものである。このような大学等における宗教教育とは、必須参加と自由参加の宗教行事と宗教の解釈、情操・倫理の形成、宗派の理解、宗教比較の主に四つの領域からなる科目としての宗教教学を意味するものと考え、その現状における認識を検証し、期待される方向性について考察を行う。

昨今、大学等の高等教育機関は、第三者評価を受けることとされており、教育における独自性が一つの評価対象となる傾向が認められる。その際、特定の宗教を建学の精神や教育の理念とする大学等は、その実践をもつて、独自性を提示するケースがあり、そのため宗派教育に傾倒する場合がある。また、授業評価の導入は教育を提供する側だけではなく、教育を享受する側の学生の意識や認識を考えなければならぬ。このような環境下において、宗教行事と宗教教学に関するリサーチを行い、その結果を分析し、期待に応えられる試案を模索する。

宗教行事の学生の関心は、自由参加のものに対して意識は低い。このことから必須参加のものに対する意識も積極性を認め

ることは難しいと考えられる。このような状況においても学生が必須で参加する宗教行事に関する意識とそれらの行事内において、関心を抱いたものは、自己の直接的な体験の比重が高く、実際に自己の意思が反映されるものと考えることができ。このようなことから宗教行事に関しては、学生が体験できる割合が高い内容のプログラムを提示することが望ましいと考察できよう。

宗教学の講義の学生の関心度は、けっして高いものとはいえないが、それが必修科目でもあり、授業内容に関する理解は保たれている。また、講義を通じて宗教学を学んだことについては、かなりの学生が意義を感じていることは望ましいことと言えよう。講義内容についての学生の関心は様々であるが、宗派の理解の箇所におけるレスポンスは低い。このようなことから大学教育における宗教学は、宗教の解釈と宗教比較が学生の関心をひき、望まれている領域であるのではないかと考えられる。

近年、文部科学省は、大学等の高等教育機関にキャリア教育の実施を要請し、学生の就労等への意識を高めることを提唱した。次の文部科学省の大学等への要請の一つは、消費者意識の教育である。複雑化する現代社会において、人がより良き人生を送るためには、消費者意識の教育の必要性は存在するものと考えられる。このような情勢の下、個人が個々の人生において出会う宗教について考え、そしてそれとより良き関係を構築するための宗教学は、消費者意識の教育と同位であり、一つの学生と社会とに期待される方向性ではないかと考察できる。